# 愛媛大学における海外教育実習プログラムの開発と実践(3)

## ── フィリピン教育実習に対する保護者の反応 ──

隅田 学[1)]，深田 昭三[1)]，菅谷 成子[2)]，池野 修[1)]，鴛原 進[1)]，熊谷 隆至[1)]
富田 英司[1)]，藤田 昌子[1)]，向 平和[1)]，吉村 直道[1)]，アグカウィリ ザリナ バラキエル[3)]

1）愛媛大学　教育学部　　2）愛媛大学　法文学部　　3）愛媛大学　大学院教育学研究科

# Development of the International Internship Programme in Education (3)

## ── Parents' responses to Ehime University Teaching Abroad Programme in the Philippines ──

Manabu SUMIDA[1)], Shozo FUKADA[1)], Nariko SUGAYA[2)], Osamu IKENO[1)], Susumu OSHIHARA[1)]
Takashi KUMAGAI[1)], Eiji TOMIDA[1)], Atsuko FUJITA[1)], Heiwa MUKO[1)]
Naomichi YOSHIMURA[1)], Agcaoili Czarina Baraquiel[3)]

1）Ehime University, Faculty of Education　　2）Ehime University, Faculty of Law & Letters
3）Ehime University, Graduate School of Education

## 1．はじめに

20世紀の終わりから21世紀の始まりにかけて，世界的な大きな変革の一つのキーワードは，グローバリゼーションであった（Zhao, 2010）。我が国の外国人登録者数は，現在，200万人を超えており，この10年間で約1.5倍になっている。日本の小中高等学校において，日本人の子どもばかりが一緒に学ぶ状況は急速に変化しつつあり，教育分野の国際性を備えた人材に対する社会的な要請はますます増大している。

教育分野の国際化という状況は，我が国の教育政策や授業内容，方法の変革へも影響を与えつつある。平成20年告示の新学習指導要領では，小学校段階から「外国語活動」が新しく含まれ，より上の学校段階においても，スーパーサイエンスハイスクール等で英語を活用しながら教科内容を学ぶ機会が増加している。

一方で，教育や教員の養成にはその国固有の歴史的・社会的・文化的背景が大きく反映されるため，これまで日本人による日本人のための教育システムを構築してきた我が国の教育システムにおいて，学校内外で急速に進展しつつある国際化にどのように対応するかは挑戦的課題である（Sumida, 2013）。教員養成プログラムの開発や認定基準の基本事項の一つに，多様な文化や言語に関する知識やそうした背景をもつ児童生徒への対応を位置づけている諸外国の実情（例えば，ダーリング－ハモンド＆バラッツースノーデン，2005/2009；Chohen et al., 2006；Villegas & Lucasm 2002）と比べて，我が国の教員養成にはまだ充分に反映されていない。そこで，我々のグループは，平成20年度より，緊急を要する現代要請に応える教員養成の高度化・国際化を目的に，学術交流協定締結校であるフィリピン大学教育学部と連携しながら，我が国において先駆的に，英語を教授言語とする海外教育実習プログラムの開発，実施を行ってきた（隅田ほか，2011）。

我々のグループが行っている，愛媛大学の学生がフィリピン大学附属学校において，英語で授業実践を行うというプログラムは，大学生からのニーズが高く，毎年50名程度の受講希望者があり，その中から20名の受講生を選考している状況であるが，教育学部内でも全ての大学生が受講を希望しているわけではなく，また受講者として選ばれた学生でも現地渡航，授業実践までには多様な支援が必要である。Stroud（2010）は，アメリカ人学生について，外国で学ぶことへの肯定的な影響要因の一つに，家族の影響を挙げている。また Cheng-Fei（2013）は，台湾の事例研究として，大学生が外国で学ぶ際に大きく影響を及ぼす要因の一つに，各種奨学金による金銭面でのサポートを挙げている。我が国では，大学生の学費や生活費を保護者が支援

しているケースが多く，就職や進路への関わりを望む保護者が多い（Benesse 教育研究開発センター，2012）。

そこで，本研究では，愛媛大学海外教育実習プログラムの有用性や意義について，参加学生の保護者を対象に調査を行い，受講生とは異なる重要なステイクホルダーの意見を分析し，今後の改善に示唆を得ることを目的とした。

## ２．愛媛大学海外教育実習プログラムの概要

### (1) プログラムの目的と到達目標

愛媛大学海外教育実習プログラムは，教育学部授業科目「教育実践特別講義」（自由選択科目）として開講されており，教育学部以外の学生も受講することが可能である。

本授業は，授業担当教員として，教育学部，法文学部，国際連携推進機構から10名以上の教員が関わっており，幼稚園から高等学校まで幅広い学校種，教科の授業に対応可能な体制が整っている。フィリピン大学教育学部からの留学生も，本プログラムのサポートに参加している（Hiwatig, Faustino, Sumda, & Pawilen, 2011）。その授業の目的及び具体的な到達目標は以下のように設定されている。

#### 本プログラムの目的

フィリピン大学教育学部（学術交流協定締結校）と連携協力しながら，英語を教授言語として授業を計画・準備し，現地渡航して授業実践を行い，教育分野における国際的な感覚を培う。

#### 具体的な到達目標

① 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各教科等から，任意の学年・内容を選び，フィリピンの教育制度や文化を踏まえながら，授業資料を英語で独自に開発することができる。

② 開発した教材や資料等を利用し，英語を教授言語として，フィリピンの児童生徒に授業を行うことができる。

③ フィリピンの学校視察や文化交流を通して，国際的な教育活動への関心を高め，様々な文化・言語の人たちと経験や理解を共有することができる。

本プログラムは，学生が英語で授業を実践する活動が含まれるが，それは単なる語学研修でもなく，単なる文化交流でもなく，学部・大学院の学習内容を，教育現場をフィールドとして実践的に高度化・国際化する点にその特徴がある。

### (2) プログラム参加学生の構成とスケジュール

本プログラムは，平成20年度より，継続発展しながら実践を行っている。平成20年度及び21年度の実践については，拙稿にてその詳細が紹介されている（隅田ほか，2011）。以下では，本論文の分析に関わる平成22年度と23年度の実践の概要を述べておく。

平成22年度の受講生は，教育学部学校教育教員養成課程学生14名，教育学部総合人間形成課程学生１名，教育学部特別支援教員養成課程学生１名，大学院教育学研究科学生１名，理学部学生２名，農学部学生１名の計20名であった。その20名の学生は，小学校社会科グループ，小学校算数グループ，小学校理科グループ，高校家庭科グループ，高校理科グループにそれぞれ４名ずつにわかれた。

本プログラムのスケジュール，大きく３つの部分に分けられる。それらは，①日本での授業準備，②フィリピンでの授業実践，③帰国後の成果報告会，である。

日本での授業準備としては，渡航前の７月末から１月上旬まで，各授業グループに分かれて，担当教員の指導を受けながら授業の指導案作りや，教材作りを行う。11月には，フィリピン大学教育学部教員を愛媛大学に招聘し，事前指導と全体講義を行う。

１月上旬に，受講生全員がフィリピンに渡航し，現地で授業実践をすることに加えて，フィリピン大学附属学校以外の現地の公立・私立校の視察や，様々な文化体験なども行う。帰国後に，フィリピン大学教育学部教員を招聘して，事後指導を行うと共に，一般公開の成果報告会を行う。平成22年度のプログラムのスケジュールと渡航スケジュールの概要をそれぞれ表１と表２に示す。

平成23年度のプログラム実践も基本的には上述の平成22年度スケジュールに準じたものである。20名の受講生を選考し，小学校社会科グループ，小学校算数グループ，小学校理科グループ，高校理科グループ，高校家庭科グループにわかれて授業準備，実践を行った。平成23年度受講生の所属内訳は，教育学部学校教員養成課程学生14名，教育学

表１．平成22年度プログラムのスケジュール

| | |
|---|---|
| 7月6日，8日 | 学生向け受講ガイダンス（説明会） |
| 7月23日 | 第１回全体講義（グループ分け） |
| 10月29日 | 第２回全体講義（HP 開設について） |
| 11月16日，～27日 | フィリピン大学教育学部アメリア・ファハルド先生による事前指導 |
| 11月16日 | 第３回全体講義（フィリピン大学教育学部アメリア・ファハルド先生） |
| 11月26日 | 第４回全体講義・中間発表会（フィリピン大学教育学部長ディナ・オカンポ先生，アメリア・ファハルド先生） |
| 12月9日 | 第５回全体講義（渡航ガイダンス） |
| 1月6日 | 第６回全体講義（直前ガイダンス） |
| 1月7日～14日 | フィリピンへの渡航と現地での教育実践体験の実施 |
| 2月3日 | フィリピン大学教育学部グレッグ・パウイレン先生による講演，平成 22 年度成果報告会（於愛媛大学総合情報メディアセンター・メディアホール） |

表２．平成22年度渡航スケジュール

| | |
|---|---|
| １月７日（金） | 愛媛大学を出発 |
| １月８日（土） | 関西空港出発<br>ニノイ・アキノ空港到着<br>歓迎パーティ |
| １月９日（日） | ビリァエスクデーロ訪問 |
| １月10日（月） | リビス小学校訪問<br>ドン・ボスコ学園訪問<br>夕食・ショッピング |
| １月11日（火） | フィリピン大学附属小中高等学校にて授業観察・授業担当教員との打ち合わせ・授業準備 |
| １月12日（水） | フィリピン大学附属小中高等学校にて授業実践・授業担当教員と授業に関する省察<br>お別れパーティ |
| １月13日（木） | ニノイ・アキノ空港出発<br>関西空港到着 |
| １月14日（金） | 愛媛大学到着 |

部総合人間形成課程学生２名，教育学部特別支援教育教員養成課程１名，大学院教育学研究科学生２名，法文学部学生１名であった。

平成23年度のプログラムと平成22年度のプログラムの相違点としては，文化視察先を，マニラ近郊のコレヒドール島やアンティポーロ教会としたこと，視察先の公立・私立学校を，クマニン小学校，ベレア科学芸術高校，ハリス・メモリアル・カレッジとしたことであった。加えて，平成23年度ついては，本プログラムが日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（ショートビジット）プログラムとして選定され，参加学生全員が奨学金の支援を受けた。

## ３．調査の対象と方法

平成22年度，23年度にフィリピンでの教育実習に参加した全ての大学生各20名，計40名について，帰国後の成果報告会が終了した後，その保護者に対して郵送式のアンケートを実施した。有効回答数は28（平成22年度の回答数は13，平成23年度の回答数は15），平均回収率は70％であった。

調査項目は，大きく４つに分かれていた。最初の設問は，本プログラムの主な活動内容である以下の10項目について，それぞれが自分の子どもにとってどの程度有用だったかを５段階で問うようになっていた（「とても有用だった」「かなり有用だった」「ある程度有用だった」「ほんの少し有用だった」「全く有用ではなかった」）。

### 設問１で挙げられた本プログラムに関わる活動

活動①　英語の指導案や授業資料を作成したこと
活動②　様々な専攻の学生と協力しながら授業準備・実践をしたこと
活動③　様々な専門分野の教員に指導を受けたこと
活動④　フィリピン大学の教員に指導を受けたこと
活動⑤　フィリピンの文化や習慣を現地で体験したこと
活動⑥　フィリピンの公立・私立の学校を訪問したこと
活動⑦　フィリピン大学教育学部・附属学校を訪問したこと
活動⑧　フィリピン大学附属学校の教員に指導を受けたこと
活動⑨　フィリピン大学附属学校にて英語で授業実践をしたこと
活動⑩　半年にわたる授業を振り返って考察し，成果を発表したこと

次に，設問２において，本プログラムの国際的な教育実践を通じて，参加した生徒の成長について，そしてその成長に何が重要だったかについて自由記述で問うた。設問３では，本プログラムについて今後改善した方がいいと思う点，設問４では，その他の気づいた点について，自由記述で問うた。

## ４．結　　果

### (1) 保護者から見た海外教育実習プログラムの有用性

上述の設問１の10項目について，保護者による，自分の子どもに対する有用性の回答を，「とても有用だった」を５，「かなり有用だった」を４，「ある程度有用だった」を３，「ほんの少し有用だった」を２，「全く有用ではなかった」を１として，各年度別に平均値を算出して図１に示す。

図１より，本プログラムに含まれる活動①「英語の指導案や授業資料を作成したこと」から活動⑩「半年にわたる授業を振り返って考察し，成果を発表したこと」までの全ての活動について，保護者の回答平均値が４を超えており，その有用性を強く感じていることがわかる。それぞれの活動項目に対する平成22年度参加学生の保護者回答平均値と平成23年度参加学生の保護者回答平均値について，対応のない $t$ 検定を行ったところ，全ての活動項目について有意な差は見られなかった。つまり，いずれの年度の参加学生の保護者も同様に，本フィリピン実習プログラムに含まれる様々な活動に強い有用性を感じていた。

そこで，平成22年度参加学生の保護者と平成23年度参加学生の保護者の回答を含めて平均値を算出し，参加学生による回答平均値と比較した。その結果を図２に示す。

図２より，保護者，参加学生共に，本プログラムに含まれる様々な活動に強い有用性を感じており，特に大学生は10項目中９項目について，保護者よりもさらに強く有用性を感じていたように見える。

図２の保護者平均値と参加学生平均値を，それぞれの活動について $t$ 検定を行ったところ，活動①（$t(66)=2.5553$），活動⑨（$t(66)=2.3824$），活動⑩（$t(46)=2.2344$）

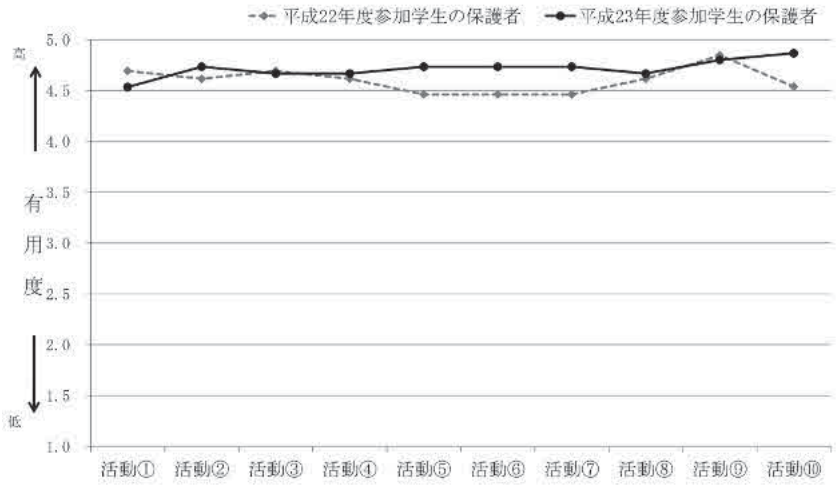
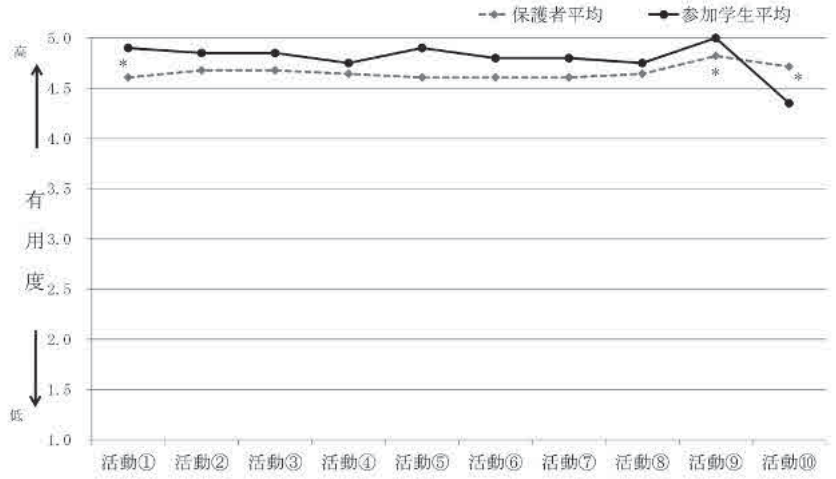



図１．保護者から見たフィリピン教育実習プログラムに含まれる各活動の有用度




※図中の＊は有意差が見られた回答項目を示す。

図２．平成22・23年度参加学生とその保護者から見たフィリピン教育実習プログラムに含まれる各活動の有用度

で５％水準の有意差が見られた。保護者も参加学生も共に，本プログラムに含まれる多様な活動全てに高い有用性を示していたが，大学生は特に，活動①「英語の指導案や授業資料を作成したこと」や活動⑨「フィリピン大学附属学校にて英語で授業実践をしたこと」について，保護者以上に大変強い有用性を感じていた。保護者は，参加学生以上に，活動⑩「半年にわたる授業を振り返って考察し，成果を発表したこと」に特に強い有用性を感じていたことがわかった。

### (2) 保護者から見た海外教育実習プログラムを通した大学生の成長

今回保護者を対象に行った調査では，設問２において，本プログラムの国際的な教育実践を通した，参加した学生の成長について，そしてその成長に何が重要だったかについて自由記述で問うていた。その記述を整理したものが表３である。

隅田ほか（2011）では，フィリピン教育実習に参加した大学生による自由記述回答から，大学生が考える自分の成長について，①英語を話すことへの積極性・英語力の向上，②国際的な視野の広がり，③自国の文化を知ることの大切さ・自国のよさの再発見，④協力して授業を作り上げることの重要性の４点について，特に多くの回答が得られたことを報告している。表３に示した，今回調査を行った保護者による参加大学生の成長に関する回答から，それら４点に加えて，保護者は，自分の子どもが新しいことに挑戦したことへの賞賛，将来の進路や職業意識へ強く影響したことへの肯定的な言及が見られた。また，海外での授業実践という明確な目標の下，仲間や指導教員，現地教員や子どもたち等，多くの良い出会いがあった事へ感謝を示す回答も多かった。

表３．海外教育実習体験を通した参加大学生の成長に関する保護者の記述回答（一部抜粋）

**（英語を話すことへの積極性・英語力の向上）**

英語が苦手で海外に行くことに躊躇していましたが，今回，この教育実習に参加させていただいて，あらためて英語の勉強を頑張った事と共に，たとえ，言葉が足りなくても一生懸命伝えようとする気持ちが大切だと感じたようです。（H22年度参加学生の保護者）

**（国際的な視野の広がり）**

帰国後，フィリピンでの授業や見学の内容を事細かに話してくれました。フィリピンの無垢で心豊かな国民性に刺激を受けたようです。自ら進んでこのプログラムに参加を希望したこと，生徒の文化を理解し，授業をつくるよう努力したことに，まず成長を感じています。（H23年度参加学生の保護者）

自分の国以外の教育現場を見ることによって教育ということに対しての視野も広がり，将来に対しての考えもまたしっかりと持てるようになったと思います。すべての教育実践体験プログラムを通して教育ということを考え，自分の将来についても今何をしなければならないかということが目標として持てたと思います。（H22年度参加学生の保護者）

**（自国の文化を知ることの大切さ・自国のよさの再発見）**

今回のフィリピン体験で，今自分がすごく恵まれた環境にあること，実際に感じ，文化の違いやこれから自分がどんな教育者を目指し，どんな点が成長できたか，日々感じていると思います。自分の将来に不安を感じ，迷ってしまうこともたくさんある中で，人間としての原点にもう一度戻り考え直すいい機会になったことや，友人や先生の指導のもと，誰かのためにたくさんの準備をしたことなど，いい体験ができたようです。（H23年度参加学生の保護者）

**（協力して授業を作り上げることの重要性）**

出発する前日まで，友達同士で，綿密な打合せを何度も何度も重ねたことが自信につながった様です。（H22年度参加学生の保護者）

成長に重要だったことは，授業をするまでの準備期間をしっかり確保され，具体的に何をしていくかを本人が仲間とともに明確にできたことだと思います。（H23年度参加学生の保護者）

**（新しい事への挑戦）**

かなり苦労していたようですが，新しい分野に挑戦するという点をまず認めてやりたいと思っていました。将来教師になるために，少しでも視野が広がる経験だったと思います。価値観の違う方々の指導を受けること，専門分野の違う学生とひとつのものを作り上げること，また，自分と違う生活圏で生きる子どもたちに何が伝えられるか考えること…どれも本人には新鮮な刺激となり，これからの人生に生かして欲しいと願っています。　（H23年度参加学生の保護者）

**（将来の進路や職業意識の高まり）**

英語があまり得意ではない娘ですが，子どもたちとのコミュニケーションも取れ，とても楽しく有意義な体験だったようです。今回の体験で外国の学校や文化にもとても興味を持ったようで，もっと長期間外国へ滞在し，その国の学校で今回のような体験をしたいと強く思ったようです。（H23年度参加学生の保護者）

今回のフィリピンでの体験で，英語の先生になりたいという子どもの頃からの夢が，より大きなものとなったことに親として感謝しております。ありがとうございました。（H23年度参加学生の保護者）

### (3) 保護者から寄せられたプログラム改善への意見

我々のグループが開発，実践中のフィリピンでの教育実践体験プログラムについて，今後改善した方がいいと思われる点を問うた設問３及び，その他に何か気づいた点を問うた設問４への回答は，大きく下のように整理することができた。

#### ①　滞在期間について

もう少し滞在期間を長くしてはどうかという回答が複数あった。現地の子どもたちや大学生とのより密な交流を提案する回答もあった。

#### ②　補完的な語学授業について

英語を教授言語として授業を実践することに関わり，コミュニケーションが十分にできるのか不安に思う保護者がおり，補完的な語学授業があれば有り難いという回答があった。

#### ③　現地滞在中の参加者との連絡について

現地滞在中は，日本にいる時と同じように携帯電話等で連絡をとることは難しい。引率教員や宿泊先の連絡先は事前に伝えていても，現地滞在中に，連絡を取りづらいのが不安であったという回答があった。

#### ④　プログラム内容の周知について

本プログラムでは，独自に渡航のしおりや案内チラシを作成して学生に配布しているが，必ずしも保護者にそれらが届いているわけでないことがわかった。今回のアンケートによって，プログラムの取り組みや成果を知ることができたという保護者もいた。

#### ⑤　渡航費用について

隅田ほか（2011）で，フィリピンで教育実践を行う利点の１つとして，フィリピンが東南アジアに位置して日本に比較的近いため，渡航費を抑えることができることが挙げられている。それでも，今回の保護者アンケートから，参加学生の中には，アルバイトをしたり，少しずつ節約したりして，渡航費用を用意している学生が少なからずいることがわかった。

## ５．全体的考察

21世紀の教育は，地域社会との結びつきが深く，その貢献が期待されると同時に，文化や言語の影響を含めた国際的な視野に立った幅広い教養と豊かな人間性が求められる。我々のグループは，学術交流協定締結校であるフィリピン大学教育学部との連携により，機動性の高い実施体制の下，教育について国際的に考え，実践する機会を提供する海外教育実習プログラムを開発し，継続的に実践している。

本プログラムの企画，実施については，参加大学生，保護者，愛媛大学教員，愛媛大学留学生，フィリピン大学教

員，フィリピン大学附属学校教員，フィリピン大学附属学校の児童生徒等の多様なステイクホルダーが想定される。これまで，フィリピン大学教員，フィリピン大学附属学校教員，フィリピン大学附属学校の児童生徒からの本プログラムへの意見の分析（Pawilen, Sumida, & Fukada, 2009, Pawilen, Sumida, Calingasan, & Fukada, 2010, Pawilen, et al., 2011），愛媛大学留学生の参画に関する分析（Hiwatig, Faustino, Sumida, & Pawilen, 2011），そして参加大学生に関する分析（隅田ほか，2011，上舘ほか，2012）を行ってきたが，本研究では，従来の関連研究分野でもまだ十分に調査がなされていない，重要なステイクホルダーとしての保護者の意見を分析した。

この海外教育実習プログラムは，①日本人以外の子どもたちを対象に工夫しながら授業を準備して実践する，②外国語（主に英語）でコミュニケーションを行う，③異文化（主にフィリピン文化）を体験する，という大きな特徴を備えている。今回の分析により，本プログラムの特徴に含まれる各種の活動，例えば英語の指導案や授業資料の作成やフィリピン大学附属学校にて英語で授業実践を行ったこと等について，保護者は強い有用性を感じていることがわかった。その有用性の度合いは，実際に参加した大学生に匹敵する強いものであり，「半年にわたる授業を振り返って考察し，成果を発表する」活動のように，大学生以上に保護者がその有用性を強く感じる活動もあった。大学生の成長という観点からも，保護者は，本プログラムの具体目標以外にも，新しい事へ挑戦する自分の子どもたちを賞賛し，その成果ばかりでなく，準備のプロセスの重要性を認識しており，プログラムを通した将来の進路や職業意識の高まりを感じていた。これらは，現代の保護者が大学生や大学教育に望むニーズと一致しており，本プログラムへの保護者からの多くの肯定的な反応を裏付けるものであった。

今後は，今回の調査結果で保護者から寄せられた有用性の視点や改善への指摘を参考にしながら，愛媛大学とフィリピン大学，そして大学生と教員と保護者の連携を深めながら，本プログラムを継続発展させていくことが重要である。その際に，本プログラムの特徴である，語学力と授業構成・実践力，異文化適応力という領域交差的な能力の相乗的な向上へ向けた，効果的かつ継続可能な評価方法や学習方法の在り方についても検討をしていくこと望まれる。

## 付　記

本プログラムの開発・実践は，平成22年度・23年度愛媛大学国際連携促進事業（愛大国際GP）による助成を受けて行われたものである（プロジェクト名「国際性を備えた教育人材を育成する海外インターンシッププログラムの開発（実施責任者：隅田学）」）。

## 引用・参考文献

Benesse 教育研究開発センター（2012）『大学生の保護者に関する調査』，ベネッセコーポレーション

Cohen, J. E., Bloom, D. E., & Martin B. M.（2006）“*Educating all children : A global agenda*” Massachusetts : American Academy of Arts and Sciences

Hiwatig, A. D., Faustino, J. B., Sumda, M., Pawilen, G. T., et al.（2011）Mentoring Ehime University student teachers for practice teaching in the Philippines : A personal experience. *Bulletin of The Faculty of Education Ehime University*, 58, 101－110.

Cheng-Fei, L.（2013）“An investigation of factors determining the study abroad destination choice : A case study of Taiwan” *Journal of Studies in International Education*. doi : 10. 1177/1028315313497061

上舘美緒里・隅田学・富田英司・池野修・深田昭三（2012）「愛媛大学における海外教育実習プログラムの開発と実践(2)－小学校理科グループにおける実践過程の分析－」『大学教育実践ジャーナル』10，15－21

L・ダーリング－ハモンド&J・バラッツ－スノーデン編(2005/2009)『よい教師を全ての教室へ－専門職としての教師に必須の知識とその習得』，新曜社

Pawilen, T. G., Sumida, M., & Fukada, S.（2009）“Preparing for future teaching : The Japanese students teachers' practice teaching experience in the Philippines” *Bulletin of the Center for Education and Educational research the Faculty of Education Ehime University* 27, 95－107

Pawilen, T. G., Sumida, M., Calingasan, L. Y., & Fukada, S.（2010）“Promoting cultural understanding : The second phase of Ehime University student teaching experience in the Philippines” *Bulletin of the Center for Education and Educational research the Faculty of Education Ehime University* 28, 35－49

Pawilen, T. G. , Sumida, M. , Agcaoili, B. C. , Faustino, B. J. , Fujita, A., Muko, H., Yoshimura, N., Sugaya, N., Ikeno, O., Oshihara, S., & Kumagai, T.（2011）“Sharing a culture of excellence in teaching across boarders : An evaluation of Ehime University students teachers practice teaching in the Philippines” *Bulletin of the Center for Education and Educational research the Faculty of Education Ehime University* 29, 55－67.

Sumida, M.（2013）“Book review : International education policy in an age of globalization and risk” *Journal of Education for Teaching : International Research and Pedagogy* 39(4), 467－469

隅田学，深田昭三，菅谷成子，池野修，鴛原進，上舘美緒里，苅田知則，熊谷隆至，ジョエル・ファウスティーノ，杉林英彦，高橋治郎，ディビッド・ボグダン，富田英司，福田安典，藤田昌子，向平和，吉村直道，ルース・バージン（2011）「愛媛大学における海外教育実習プログラムの開発と実践」，『大学教育実践ジャーナル』 9，65－73

Stroud, A. H.（2010）“Who plants (not) to study abroad ? An examination of U. S. student intent” *Journal of Studies in*

*International Education*, 14(5), 491－507

Villegas, A., & Lucas, T. (2002) "Preparing culturally responsive teachers: Rethinking the curriculum" *Journal of Teacher Education*, 53(1), 20－32

Zhao, Y. (2010) "Preparing globally competent teachers: A new imperative for teacher education" *Journal of Teacher Education*, 61(5), 422－43